



5. 一般工事

5.1 適用範囲

本章は、RM造部材を施工する場合の、組積関連の工事を除いた一般的な建築工事の施工方法に適用する。

5.2 綱張り

綱張りは、組積部分の調整に用いる。

5.3 やり方

- 1) 綱張りは、綱かき機を用いて行われる。
2) 綱張り機は、組積部分の隅に設置される。

5.4 足場・その他仮設物

- 1) 足場は、建築工事に従事する作業員が作業の安全を保持できるように十分堅固となるように組み立てる。
2) 工事の規模、工事現場の状況に応じて仮設計画書を作成し、適切な場所に仮囲い・仮設建物・衛生施設等を設け、工事の事と品質の確保を図る。

5.5 地盤および基礎工事

- 1) 掘削は、掘削機を用いて行われる。
2) 捨てコンクリートの打込みは先立ち、必要に応じて割栗石や敷砂利等を施し、タンバや振動締め機等で十分に締め固める。
3) 地盤改良を行う場合には、その方法が設計図書または打合せによって指定されたものであることを確認する。
4) 直接基礎の工事に際しては、基礎スラブ直下の地盤が設計図書に記載されている地層で、かつ所要の支持力を有していることを確認する。
5) 支持杭の場合には、杭先端が十分な支持力を有する地層に達しており、かつ所要の支持力が得られていることを確認する。
6) 摩擦杭の場合には、設計図書に指定された地層に杭が設置されていることを確認する。
7) 基礎スラブはRC造とし、基礎ばりはRC造もしくはRM造とする。基礎工事では、壁体のRMユニット割付け図に基づきRMユニットの位置を正確に施工する。

- a) 配筋は、設計図書どおりの呼び名の鉄筋を用いて所要の本数および間隔を確保するとともに、所要の加工寸法を有し、かつ所要定着長さや重ね継手長さを十分確保していることを確認する。また、かぶり厚さが所要寸法以上確保できることを確認する。
b) 型枠は堅固に組み立てる。この時、断面が設計図書どおりで確保でき、かつ所要のかぶり厚さが確保されていることを確認する。
c) コンクリートの打込みは、断面の隅々までコンクリートが行き渡り、かつ欠陥が生じないように十分締固める。
d) 基礎ばりに使用するRMユニットは、コンクリートRMユニットにあっては1種または2種とし、設計図書による。
e) 基礎ばりの横補強筋およびせん断補強筋の配筋に際しては、適切なホルダー等を用いて、RMユニットのフェイスシェルやウェブとの間隔が設計図書で指定された数値以上確保できるようにする。

5.6 墨出し

墨出しは、組積部分の位置を正確に行う。

5.7 縦やり方

- 1) 縦やり方は適切な材料を用い、足場・型枠などに連結させることなく正確・堅固に設け、かつ作業前に必ず検査し、位置を正確に保持する。
2) 縦やり方にかえて、目地規定を使用する場合は、水準器と下振りとを併用する。

5.8 配管

- 1) 上下水道・ガス配管は、設計図書に示された仕様通りに施工する。
2) 電気配管
RMユニットの空洞部に電気配管をする場合は、グラウト材の充填に支障のないように縦方向のみとし、空洞部のフェイスシェルの片側によせ設置する。
3) 耐力壁・壁ばり接合部に設けることのできる空洞関係のスリーブ等の貫通口は、RMユニットのウェブに当たらない位置に設ける。
4) 構造図に記載のない直径の小開口は、設計者・工事監理者と協議の上で設ける。

5.9 清掃および補修

- 1) 作業環境の整備・事故防止の目的から、作業現場は、常に整理整頓・清掃する。
2) 補修
組積部分の損傷は、設計図書に示された仕様通りに補修する。

5.10 仕上げ

- 1) 仕上げは、組積部分の性能を向上させるために、外壁部の仕上げについて考慮することが望ましい。
2) 耐久性、防水性、断熱性など諸々の性能を確実に向上させるために、外壁部の仕上げについて考慮することが望ましい。

6. 組積工事

6.1 適用範囲

本章は、RMユニットの組積に関する事項について定める。

6.2 組積工事の原則

- 1) RMユニットは、原則として目地モルタルを用いて組積する。ただし、打込み目地構法用RMユニットは1段目の組積には根付けモルタルを、2段目以降の組積には予備接着剤（施工時の安定のためにRMユニット同士を一時的に固定する接着剤）などを用いて組積する。
2) 組積作業は、グラウト材の打込み易さ、転倒安全性、組積精度等を考慮して行う。特に、グラウト材の充填前の組積壁は突っ張り機を用いて、垂直に保たれる。

6.3 RMユニットの準備

RMユニットは、設計図に示された品質のものを施工図に示す通りの数量を準備する。RMユニットの損傷および変形は許容範囲内とする。

6.4 RMユニットの加工

- 1) RMユニットの切断・穴あけ等の加工は、施工図に従い、RMユニット組積作業前に行い、組積作業に支障のないよう段取りをする。
2) RMユニットの加工は、有害な割れ・欠け・ひび割れ等が生じないように注意に行う。

6.5 組積下地

- 1) 組積下地には不陸がないこと、および耐力壁下部において、せん断力が十分伝達されるようになっていることを確認する。
2) 組積下地の不陸は、コンクリートで補修する。

6.6 RMユニットの組積

- 1) 根付け部分の組積は特に精度よく組積する。また、根付け部分の組積完了後、壁体に有害な振動・衝撃を与えないよう養生する。
2) 1日のRMユニットの積高さは、1.6m以下を標準とする。実際の積高さの上限は環境条件を考慮して決定し、工事監理者の承認を得る。
3) 1日のRMユニットの積高さは、1.6m以下を標準とする。実際の積高さの上限は環境条件を考慮して決定し、工事監理者の承認を得る。
4) 掃除口は、落下した目地モルタルが容易に取り除ける構造とし、適切な位置に設ける。掃除口の大きさおよび位置は特記による。空洞部に落下したモルタルは、1日の作業の終了時に取り除き清掃する。ただし、打込み目地構法の場合はこの限りでない。
5) RMユニットの組積は、原則として縦やり方を基準とし、これに水系を張り、この水系にならって積む。
6) RMユニットの組積は、原則としてウェブの大きく欠き込まれている方を下にして積む。
7) ポンディングパターンは、原則として交差部を含めて平目地とならないように組積する。
8) 目地モルタルは、空洞部内にはみ出さぬよう横目地および縦目地ともに接合面全面に塗り付ける。目地材の種類は特記による。また、薄目地構法の場合の目地幅、縦目地の構法、1日の組積高さの限度は特記による。
9) 予備接着剤法（予備接着剤を用いて組積する構法）による打込み目地構法の場合、RMユニットの組積にあたって予備接着剤を用いる。予備接着剤はRMユニットの縦目地および横目地部分の接合面全面に均等に塗り付ける。予備接着剤の種類、施工方法は設計図書に示される。

6.7 まぐさおよび壁ばり部の組積

- 1) まぐさは、組積部分の隅々に設置される。
2) 壁ばりおよび耐力壁・壁ばり接合部は、鉄筋が込み合う箇所になるので、施工図で施工手順をよく検討した上で組積する。

6.8 基礎ばりの組積

- 1) 基礎ばりに使用するRMユニットは、設計図書に記載されるRM組積体の設計基準強度を実現でき、耐久性および防水性上要求される品質等級のものを使用する。
2) 基礎ばりに使用するRMユニットは、その上端の水平精度が確実に得られるよう水平基準線に対して所定の範囲に収まるよう組積する。

6.9 剛度耐力および壁ばりの養生

目地モルタルが硬化するまでは、組積壁に有害な振動・衝撃を与えないよう養生する。

6.10 目地仕上げ

- 1) 目地仕上げによって目地部に凹部を形成するときは、その深さは構造壁を構成するフェイスシェル表面より片側につき3mm以下とする。
2) 押し目地仕上げをする場合は、目地モルタルの硬化に先立ち、目地ごとを用い隙間なく目地ずりを行い、ちり（散）を一律に除去する。
3) 入れ目地モルタルをして化粧目地仕上げを施す場合は、目地モルタル硬化に先立ち、目地モルタルをかきとる。目地には、原則として硬化後、化粧目地モルタルを入念に塗り込み、ちり（散）を一律に仕上げる。ちり幅および目地形状は、設計図書による。

6.11 壁体の仕上げ精度の確保

組積した壁体の仕上げの平坦さが水平および鉛直面ともに3mにつき10mm以下となるように、縦やり方や水平水系を精度よく行い、養生のように行われる。

6.12 寒中および暑中の施工

- 1) 寒中および暑中の施工の適用を受ける期間は、特記または工事監理者の指示による。
2) 寒中および暑中環境下における施工に際しては、工事開始前にこれらの条件に対応した資材・施設・目地モルタルの調査・養生方法とそれらの管理方法などについて必要な事項を定め、工事監理者の承認を受ける。

6.13 真雨および強風時の施工

- 1) 真雨および強風時は、組積部分の隅々に設置される。
2) 強風により、すでに組積したRMユニットが転倒するおそれがあるときは、転倒防止のために有効な措置をとる。

7. 型枠工事

7.1 適用範囲

本章は、RMユニットの組積部分の型枠に関する事項について定める。

7.2 型枠の施工

型枠の施工は設計図書に基づいて作成された施工図にしたがって行われるものとし、設計図に示されたコンクリート部材の位置・形状および寸法を厳密に遵守する。

7.3 型枠の加工および組立

- 1) 型枠は、RMユニットを傷付けないように組立てができ、コンクリート施工時の荷重・コンクリートの側圧・打込み時の振動・衝撃などに耐え、かつ有害な水漏れがなく容易に取外しができるものとする。
2) 型枠の組立ては、目地モルタルが硬化してから行い、RM組積体に有害な振動・衝撃を与えないようにする。
3) RM造部材との取合い部におけるせき板は、目地棒などを用い、RMユニットとの隙間が生じないようにし、コンクリート打込時に目地の位置ずれを防止する。
4) 型枠は、コンクリートの打込みに先立ち、設計寸法、スリーブ埋込みおよび金物類の位置と数量および支保工の安全性などについて確認し、工事監理者の承認を受ける。

7.4 型枠の取外し

- 1) 型枠の取外しは、組積部分の強度が十分に確保されていることを確認する。
2) せき板の取外し時には、工事監理者の検査を受け、コンクリートの不良箇所があれば適切に補修する。

8. 鉄筋工事

8.1 適用範囲

本章は、RMユニットの組積部分の鉄筋に関する事項について定める。

8.2 鉄筋の加工

- 1) 鉄筋は、設計図書に示された仕様通りに加工される。
2) 鉄筋は、設計図書または施工図に従い、所定の寸法に切断する。加工寸法の許容誤差は表8.1による。また、各加工寸法および切断寸法は設計図書に示される。

表8.1 加工寸法の許容差

Table with 4 columns: 項目, 符号, 許容差 (mm), and 備考. Rows include 鉄筋 (縦筋, 横筋) and 加工寸法 (縦筋, 横筋).

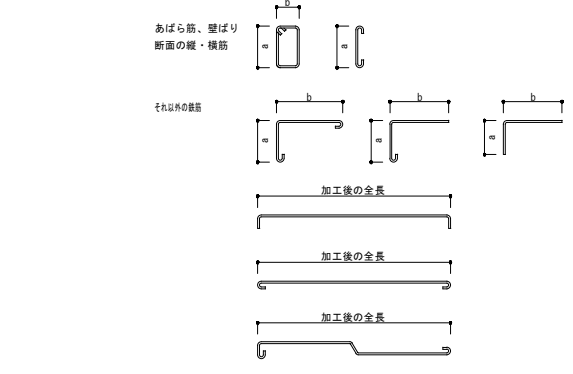


図8.1 加工寸法の測り方

- 1) 折曲げは、冷間加工を原則とする。
2) 折曲げは、設計図に示された仕様通りに行われる。
3) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。
4) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。
5) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。
6) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。
7) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。
8) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。
9) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。
10) 曲げ半径は、設計図に示された仕様通りに行われる。

上記、a)からd)で、直交部材 (①スラブ、②交差壁、③スラブ) のある場合は、90度に曲げて直交部材内に定着してもよい。

8.3 鉄筋の清掃

- 1) 鉄筋の組立てに先立ち、浮錆び・油類・ごみ・泥など、グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルとの付着を妨げる恐れのあるものは除去する。
2) 鉄筋の組立てからグラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの打込みまで長時間を経過した場合は、打込みに先立ち、腐蝕し、表面に付着したものを除去する。

8.4 鉄筋の組立て

- 1) 鉄筋は、設計図および施工図にしたがい正しく配筋し、グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの打込み完了まで移動しないよう十分堅固に組み立てる。
2) スペーサー・吊り金具などは、設計図および施工図にしたがい正しく配置し、鉄筋とRMユニット内面・せき板との所要のあきおよび保護間隔などを正しく確保する。
3) 耐力壁の鉄筋の施工方法は、ポストセット工法またはプリセット工法のいずれかを選定するとともに、下記による。

- a) ポストセット工法
1) 鉄筋は、スラブ上または壁面上に設置される。
2) 組積部分の隅々に設置される。
3) 組積部分の隅々に設置される。
b) プリセット工法
1) 鉄筋は、基礎ばりのコンクリートまたはグラウト材の打込み前に先立ち配筋する。
2) 鉄筋は、基礎ばりのコンクリートまたはグラウト材の打込み前に先立ち配筋する。
3) 鉄筋は、基礎ばりのコンクリートまたはグラウト材の打込み前に先立ち配筋する。
c) 構造および検査の留意
1) 横筋は、RMユニットを組積中に所定の位置に配筋し、移動しないよう固定する。
2) 横筋は、ウェブの上の直に設置してはならない。ただし、吸水率の厚さ試験に合格するRMユニットを使用する場合は、組積部分の隅々に設置される。

8.5 鉄筋のかぶり厚さおよび保護間隔

- 1) 細小のかぶり厚さ
2) 細小のかぶり厚さは、設計図書に示される。

表8.2 細小かぶり厚さ

Table with 3 columns: 部位, 細小かぶり厚さ (mm), and 備考. Rows include 土に接しない部分 (屋根スラブ, 床スラブ, 非耐力壁, 柱, 梁) and 土に接する部分 (基礎, 柱).

註(1)：RM造部分に耐久性上有効な仕上げを用いる場合には、30mmとすることができる。

- b. フェイスシェルから最外縁の鉄筋までのあきは、それぞれ使用するグラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの骨材の最大粒径の1.25倍以下とする。
c. 外壁面は、雨水の浸透防止および耐久性確保のために、必要に応じて適切な防水処理を行う。

(2) 鉄筋の間隔

鉄筋の間隔とあきの最小値は、表8.3による。

表8.3 鉄筋の間隔とあきの最小値

Table with 3 columns: 鉄筋, 間隔, あき. Rows include 縦筋 and 丸筋, with sub-rows for 間隔 and あき.

註) D：鉄筋の最外径、d：鉄筋径

8.6 鉄筋の継手および定着

- 1) 継手および定着は、設計図書に示された仕様通りに行われる。
2) 継手および定着は、設計図書に示された仕様通りに行われる。

表8.4 鉄筋の重ね継手および定着の長さ

Table with 5 columns: 鉄筋種, RM組積体の設計基準強度 Fm/2 (N/mm^2), 重ね継手長さ L 1: (mm), 定着長さ (一般 L 2: (mm), 小ぶり L 3: (mm), スラブ L 4: (mm)), and 備考. Rows include SD295A, SD6, and SD8.

【註】 dは異形鉄筋の呼び名 (mm)。 dが異なる鉄筋の重ね継手の場合は小さい方のdを用いる。

※：グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの設計基準強度がRM組積体の設計基準強度より小さい場合は、グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの設計基準強度を用いる。

- (3) 継手・定着位置を変更する場合、および図面に示されていない位置における場合、構造設計者と協議の上変更する。

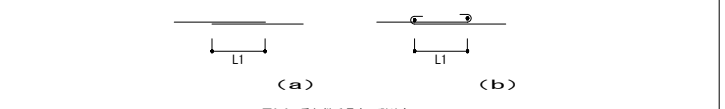


図8.2 重ね継手長さの測り方

- 1) 定着長さの測り方は、図8.3による。
2) 重ね継手以外の接合方法による継手は、設計図に示されたものとし、施工は慣例のある施工者が行う。

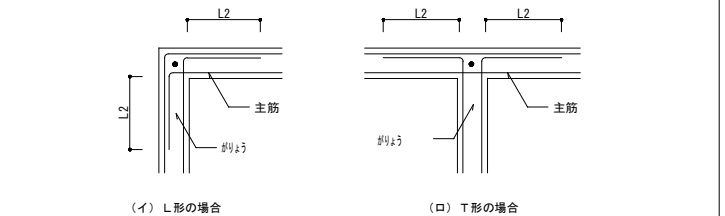
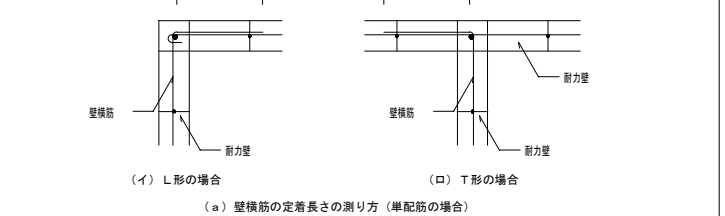


図8.3 定着長さの測り方

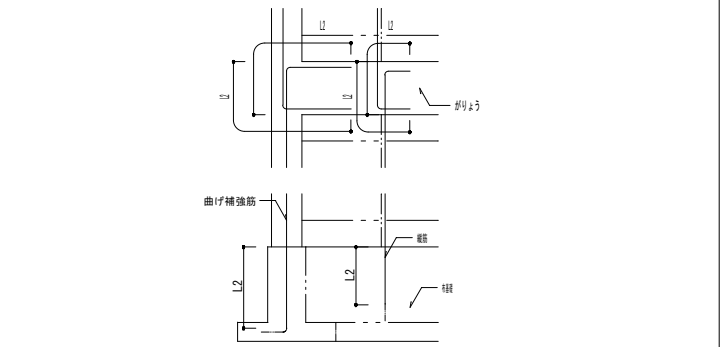


図8.3 定着長さの測り方

- 8.7 スパイラル筋の組立て
スパイラル筋は、設計図書および施工図にしたがい正しく配置し、スパイラル筋とRMユニットの間隔を保持する。

- 8.8 目地筋の挿入
目地筋は、地震時におけるRMユニットのフェイスシェルの落下防止を目的とするもので、設計図で指定された位置に配置する。

8.9 配筋検査

- (1) グラウト材打込み前に配筋検査を行い、設計図書に指定されたとおり配筋が行われていることを確認する。

9. グラウト工事

9.1 適用範囲

本章は、RMユニットの空洞部に、グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルを充填する工事に適用する。

9.2 グラウト材充填計画の立案

- ① 打ち合わせ、現場調査、計画立案
② グラウト材の材料・配合
③ コンクリートポンプ設備の稼働確認
④ グラウト材の搬送・管理・積載確認

9.3 準備

- (1) 掃除口は、きれいに清掃されていることを確認し、グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの側圧に耐えられるように型枠でふさぐ。
(2) 水漏しを行う場合は、RMユニットの内面から行い、RMユニットがグラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの中の水分を重要吸収しないようにする。
(3) グラウト材充填の際、配置した鉄筋等をコンクリートホースで荒らさないようにコンクリートホース用のうま等を設置する。

9.4 のろけけ

- (1) のろけけは、グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの分離防止の目的でグラウト材の充填直前に行う。

9.5 充填

- (1) グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの流動性は、RMユニットの空洞の大きさにより選定し、充填に適したものとす。
(2) グラウト材の充填方法には、漏し打ちと区分打ちがあり、建築物の規模・施工環境に応じて選定する。
(3) 漏し打ちの場合、1回の充填高さは1.5m~2m程度以下とし、充填間隔時間は原則として90分を超えてはならない。

9.6 締固め

- (1) グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの締固めには、公称粒径45mm以下のコンクリート用棒形振動機で行い、必要に応じて締固め機を使用する。
(2) 棒形振動機は、充填各層毎に用いるその層の下部に先端が届くまで、ほぼ垂直に挿入する。挿入間隔は隣接した振動部の振動幅の半分程度とし、締固めを行う。
(3) 棒形振動機に代えて突き棒を用いる場合は、空洞部の隅ずみまで充填されるよう充分突き固める。

9.7 グラウト養生管理

グラウト材を充填した直後は、縦横壁に有害な振動・衝撃を与えないようにする。

9.8 寒中および暑中における施工

- (1) 寒中および暑中の施工の適用を受ける期間は、特記または工事管理者の指示による。
(2) 寒中および暑中環境下における施工に際しては、工事開始前にこれらの条件に対応した資材・施設・グラウトコンクリートまたはグラウトモルタルの調査・養生方法とそれらの管理方法などについて必要な事項を定め、工事管理者の承認を受ける。

9.9 試験および検査

グラウト材の試験および検査は、スランプ・空気量・フロー値・温度の測定、グラウト材の強度推定のための圧縮強度の試験・RM組織体の強度推定のためのプリズム圧縮強度の試験およびグラウト状態の確認等を行う。

10. 試験および検査方法

10.1 適用範囲

- ① 種類、形状・寸法、外観および圧縮強度、吸水率、透水性、吸水層厚さなどの品質の試験・検査を表10.1にしたがって行う。
② 試験結果については、記録簿に記載する。

10.2 RMユニットの試験・検査方法

RMユニットの種類・形状・寸法、外観および圧縮強度、吸水率、透水性、吸水層厚さなどの品質の試験・検査を表10.1にしたがって行う。

表10.1 RMユニットの試験・検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Design/Shape/Dimension, Appearance, Compressive Strength, Absorption/Water Permeability/Absorption Layer Thickness.

※：横筋をウェブに直接設置する場合には、吸水層厚さ試験に合格するRMユニットを使用する。

10.3 セメントの試験・検査方法

セメントの種類・品質の確認は、表10.2による。

表10.2 セメントの試験・検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Cement Type, Specific Gravity/Setting Time/Strength, Surface Area/Setting Time/Strength.

10.4 骨材の試験・検査方法

骨材の種類・品質の確認は、表10.3による。

表10.3 骨材の試験・検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Aggregate Type, Maximum Particle Size, Gradation, Specific Gravity/Absorption, Adhesive Content, Washability.

Table with 2 columns: Item, Judgment Standard. Row: Organic Impurities (JIS A 1105, JASS 5 T-202, JIS A 5002, JIS A 5308).

表10.4a 混和材料の試験・検査方法

10.5 混和材料の試験・検査方法

骨材の種類・品質の確認は、表10.3による。

表10.4a 混和材料の試験・検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Chemical Admixtures, Flowing Admixtures.

表10.4b RM適用混和剤の試験・検査方法

Table with 3 columns: Item, Judgment Standard, Test Method. Rows include Expansion/Contraction, Compression, Bleeding/Separation.

【注】 1) 一般に、打込まれたグラウト材は上部ほど圧力が小さいために膨張が大きくなり、圧縮強度が小さくなる。

10.6 モルタルの試験・検査方法

- (1) 目地モルタル、グラウトコンクリート、グラウトモルタル、およびRC造部材に用いるコンクリートの試験方法は表10.5によるほか、下記(2)による。
(2) JIS A 5308 (レディーミクストコンクリート) -2003の規格品およびこれに準ずるものの品質管理は、JIS A 5308の9「検査」による。

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Freshness, Slump, Specific Gravity, Compressive Strength.

※1 目地モルタルの場合を除く。
※2 グラウト材の場合、試験体は「RM-001 グラウト材からのコアの切り取り方法および強度試験方法」により作製した試験体を用いることができる。この場合養生は現場養生とし、材齢は28日を標準とする。

10.7 鉄筋の試験・検査方法

鉄筋の種類・品質の確認は、表10.8による。

表10.6 鉄筋の試験・検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Steel Bar Type, Yield Point/Tensile Strength, Steel Bar Type.

10.8 鉄筋の加工・施工における試験・検査方法

① 鉄筋の加工・施工における試験・検査方法は、表10.9による。

表10.7 鉄筋の加工・施工における試験・検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Steel Bar Type/Size, Quantity/Installation, Lap/Splicing.

10.9 鉄筋の手溶接およびガス圧接による鉄筋継手の試験・検査方法は表10.8による。

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Arc Welding, Gas Welding.

- (3) アーク手溶接およびガス圧接以外の鉄筋継手の試験・検査は各工法の試験・検査要領による。

10.9 鉄筋の手溶接およびガス圧接による鉄筋継手の試験・検査方法

① 鉄筋の手溶接およびガス圧接による鉄筋継手の試験・検査方法は、表10.9による。

表10.9 鉄筋の手溶接およびガス圧接による鉄筋継手の試験・検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Unit Position, Horizontal/Vertical Position, Ground Position.

10.10 プリズム試験方法

① プリズムの試験方法は、表10.10による。

表10.10 プリズムの試験方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Design Strength, Strength Management, Strength Management.

- (2) プリズム試験体の製作とプリズム圧縮試験方法は、「RM-002 プリズム試験体の製作方法及びプリズム圧縮強度試験方法」による。
i) 試験体製作時期
ii) プリズム試験体は、建築物に使用するものと同じRMユニット、目地モルタル、グラウト材を使用するとともに、同一の養生方法をとることを要する。
iii) 形状
iv) グラウト材
v) 養生
vi) キャッピング
vii) 試験機
viii) 試験体の寸法測定
ix) 圧縮試験
x) 試験体は28日を標準とするが、温度が低い場合などでグラウト材の強度発現が遅い場合は、試験材齢を延長してもよい。

- i) 試験体は、建築物に使用するものと同じRMユニット、目地モルタル、グラウト材を使用するとともに、同一の養生方法をとることを要する。
ii) 形状
iii) 試験体は、建築物に使用するものと同じRMユニット、目地モルタル、グラウト材を使用するとともに、同一の養生方法をとることを要する。
iv) グラウト材
v) 養生
vi) キャッピング
vii) 試験機
viii) 試験体の寸法測定
ix) 圧縮試験
x) 試験体は28日を標準とするが、温度が低い場合などでグラウト材の強度発現が遅い場合は、試験材齢を延長してもよい。

プリズムの圧縮強度 (N/mm^2) = k \* Pmax / (A \* l)
ここで、Pmax: 最大荷重 (N)
A: 試験体の加圧正味断面積 (mm^2)
l: 試験体の長さ (mm)
k: 試験体の形状係数
e: アングラウトプリズムの縦横比
Fu: RMユニットの正味断面圧縮強度 (N/mm^2)

Table with 2 columns: h/t, k. Rows: 2.0, 3.0, 4.0, 5.0 and 0.83, 1.00, 1.08, 1.14.

- xi) 結果の評価方法
xii) 報告事項
xiii) 養生管理
xiv) 養生管理
xv) 養生管理
xvi) 養生管理
xvii) 養生管理
xviii) 養生管理
xix) 養生管理
xx) 養生管理

10.11 グラウト材の充填性検査方法

グラウト材の充填性検査方法は、表10.11による。

表10.11 グラウト材の充填性検査方法

Table with 4 columns: Item, Judgment Standard, Test Method, Period. Rows include Filling Time, Hardening Time.

11. 特記仕様

11.1 総則

本章は、本規格に準拠した仕様とする。

11.2 特記事項

a) 適用規程を特記する。
b) 特記事項

Table with 3 columns: Item, Category, Remarks. Row: 3.3 (2) セメント

Table with 3 columns: Item, Category, Remarks. Row: 3.6 (4) 混和材料

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 4.3 (3) 目地モルタルの調査

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 4.3 (6) 目地モルタルの混和材料

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 4.3 (9) 目地モルタルの養生方法

Table with 6 columns: Item, Category, Remarks. Row: 4.4 (1) グラウトコンクリートの調査

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.3 RMユニットの養生および目地養生

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材の目地幅

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材の目地幅

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材の目地幅

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材の目地幅

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材の目地幅

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材の目地幅

Table with 4 columns: Item, Category, Remarks. Row: 6.6 (8) 目地材の目地幅